

視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造

—— 性及び専攻学科との関連 ——

河 内 清 彦¹

本研究では、視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造を解明するため、体育学系の男子学生108名と、教育・社会学系の男女学生137名にイメージ連想テストを実施した。得られた2686の記述語を、KJ法により分類し、43項目を選んだ。これらの記述語に数量化理論Ⅲ類を適用し、標的概念と記述語の重み係数により相互の関連を検討した。その結果、障害学生の標的概念は、障害、性、学科を超え、「痛ましさ」と「忍耐力」の軸に囲まれた意味空間に位置していたが、記述語のレベルではグループ差がみられた。これらの標的概念と最もかけ離れていたのは、「好みの女子学生」と、「学力優秀な学生」の標的概念であったが、ここでは性と学科の影響が推測された。スチューデント・アパシー傾向を示す「自分自身」の標的概念は、他の標的概念との関連はなかった。障害学生の標的概念について記述語別の出現頻数による考察を行ったが、「視覚障害学生」は努力家で強く素晴らしいが、大変で苦しいという相反する記述語が共存していた。「聴覚障害学生」も全体的にはこれと類似していたが、性格面では前者が暗く、後者が明るいなど、部分的には障害種別の違いが示された。

キーワード：視覚障害学生、聴覚障害学生、イメージの意味構造、専攻学科、性別

問 題

小・中学校の教員免許状取得を志望する学生に、障害者や高齢者の介護等の体験学習が義務づけられている昨今、わが国においても「弱者」とよばれる人々に対する関心が高まりつつあることは事実であろう。しかし、障害者問題に取り組んでいる大学の数は極めて少なく、一般大学に進学した障害学生が解決しなければならない課題は非常に多い（障害学生の高等教育国際会議実行委員会, 1997; 谷合, 1995; 学生ボランティア活動についての調査プロジェクトチーム, 1997; わかこま自立生活情報室, 1998）。例えば、障害者の周囲にいる健常人々の日常行動には否定的なものも多く（河内, 1994）、一般大学に進学した障害学生も周囲の人々との良好な対人関係を構築するのが難しい状態に置かれている（障害学生問題研究会, 1990）。

この否定的行動を引き起こす心理的要因の1つとして、否定的な態度をあげることができる。例えば、世界中で最も広く使われている「障害者に対する態度尺度 (ATDP)」を開発した Yuker (1965) は、態度というものは行動を規定する要因であり、行動に対するある種の傾向を作り出すものであると定義した。それゆえ、ある人の態度内容を把握することは、その人の行動を

理解し予測するのに役立つ情報を得ることにもなるとしている。さらに彼は、健常者の態度が否定的かつ拒否的であれば、健常者は障害者を避け、彼等の間の相互作用を最小にしようとすると述べている。一方、障害者に対する態度と行動との関連についての広範囲の実証的研究をレビューした Cloerkes (1979) は、態度と行動との間には、Yuker が述べているような一貫した関連があるという仮説を無批判に受け入れるべきではないことを指摘した。すなわち彼は、障害者に対する態度と行動の両方を調査した17の研究を再検討した結果、十分な関連があるのは4だけで、他はあってもわずかであることをみいだした。しかし、障害者に対する社会的反応についての社会科学的分析に関して言えば、目下のところ態度研究に代わるべき研究法がないだけでなく、態度は単なる1つの変数ではあっても、非常に重要な変数であり、そこから実際の行動に結びつくような帰納的推理を行うこともできると結論づけている。

かくして、健常学生の障害学生に対する否定的な行動を理解する上で、健常学生の障害学生に対する態度を探究することは有意義なことと言える。そこで、障害研究の分野においても多くの態度研究がなされてきたが、その中核をなしているのが態度尺度による研究である (Altman, 1981; 河内, 1990a)。しかし態度尺度は特定の事象に関する項目内容に限定されている上に、質

¹ 筑波大学心身障害学系

E-mail: kawauchi@human.tsukuba.ac.jp

問項目の中には差別を助長する危険性のあるものもあり、その使用には注意が必要である。また、障害者に関する項目への反応が否定的であったとしても、それが障害者に対してだけなのか、それとも健常者にも当てはまるかで解釈が異なってくる(島田・高木・秋庭・熊谷・清宮, 1974)。従って、障害者に対する態度を的確に把握するためには、障害者を含むさまざまな対象について調査し、それぞれの間の関連性を明らかにすることが必要である。

このような目的のためには、障害学研究でこれまで使用されてきた種々の態度測定用具のなかでも(Antonak & Livneh, 1988), Osgood 等が開発した SD 法(Osgood, Suci & Tannenbaum, 1957) のような測度が最も適している(島田等, 1974)。なぜならば, SD 法ではさまざまな刺激対象を提示し, そこから個人が受け取る感情的特性やイメージ, すなわち情緒的意味の構造と相互の関連を検討するため(岩下, 1983), 障害者に対する反応が固有のものであるか否かを決定することができるからである。

ところで, イメージと態度とは同一の構成概念ではないが, 明確に区別できないのも事実である。従って, 従来態度や意識として測定されてきたもののなかにはかなりの部分イメージが含まれていることを飽戸(1970)は指摘している。さらに彼は, イメージは態度と同様に, 行動を規定する要因の一種であることを, 消費生活, 政治行動などの研究から明らかにしている。従って, 障害者に対する行動を理解する上で, 障害者に対するイメージを探求することは有意義であろう。

この点からも SD 法を用いることは望ましいが(島田等, 1974), ここで採用される形容詞対の数は多くとも40前後であるため, 多くの対象をターゲットとした場合には, 当該分野の情報量のかなりの部分が失われてしまう危険性がある。つまり, 採用した形容詞対だけでさまざまな刺激対象のイメージの全てを, また, 異なるグループの反応をカバーできるのかは疑問である。それに加え, 障害者に対する態度やイメージの中には, 両面感情的な要素が存在しているため(Katz, Hass & Bailey, 1988), 刺激対象から個人が受け取る情緒的意味の中には相反する形容詞の両方が共存する可能性があり, このような場合にはそれらを証明するためにも, 単極性の尺度を用いることの必要性が指摘されている(森, 1983)。また, 結果の解釈に決定的な影響を及ぼす形容詞の選択過程を十分に示した研究が少なく(河内, 1993), 測定用具の妥当性にも問題が残る。

これらの問題を解決するためには, (1)障害学生とは

タイプの異なる大学生を標的概念に加え, (2)個々の標的概念によって直接想起される記述語の意味内容を検討し, (3)標的概念を代表する記述語の意味構造を統計的に解明し, 最後に(4)得られた意味構造の多次元的関連性を機能的に考察することが肝要である。

このような視点に基づき, 本研究では, 刺激対象として障害学生(ここでは視覚障害学生と聴覚障害学生)に加え, 4種類の健常学生(すなわち, 好みの女子学生, 好みの男子学生, 学力優秀な学生, 自分自身)を選び, それらの刺激対象に対し健常学生が想起した形容語をそのまま用いて, 各概念相互の多次元的関連性を数量化理論Ⅲ類を用いて明らかにするとともに, 視覚障害学生及び聴覚障害学生固有の意味内容を考察する。それに加え, 本研究ではこれらの標的概念の意味構造と関連する個人的属性についても検討する。その際, 従来多くの実証的研究で検討されてきた男女差の要因とともに(Cloerkes, 1979; Horne, 1985; 河内, 1990a, 1990b; Yucker & Block, 1986など), 大学生の重要な属性である専攻学科の要因についても検討する。男女差の要因については, 以前は男性よりも女性の方が障害者に対し態度が好意的であるという研究が多かったが, 時代の変化とともに男女の好意度に違いがみられなくなったことが報告されている(河内, 1990a; Yucker & Block, 1986)。しかし, 最近でも, 障害者との交流に対する大学生の自己効力感には男女差がみられるという報告もあり(河内, 1999; 河内・四日市, 1998), 測定内容や測定用具によっても男女差の影響は異なることが推測される。他方, 専攻学科の要因については, 教育学の学生は, 他の学科の学生よりも障害者を受け入れやすいという結果がある一方で(Auvenshine, 1962), 教育学と保健学や児童学を専攻する学生には障害者に対する態度に相違がみられず, 相違があるのは経済学や工学を専攻する学生であるという結果が報告されている(Gannon & MacLean, 1995; 河内, 1990a, 1990b)。この場合, 専攻学科の影響は, 学問対象が人間か否か, すなわち人間への関心の程度の違いであると解釈している(河内, 1990a, 1990b)。しかし, 視覚障害学生との交流に対する自己効力感については, 文科系の学生と理科系の学生とに差異はみいだされていない(河内, 1999)。いずれにしても, これらの学問的分野の単なる違いだけでは十分な説明をすることは困難であろう。ところで, これまでの研究では, 障害者自身の能力, 例えば運動能力の問題と, それらに關係する学科, 例えば体育学科との関連性については検討が全くなされていらない。しかし, 視覚障害者や肢体不自由者は, 一般的に言って通常の競技スポーツでの活

動が非常に困難であるのに対し、聴覚障害者の中には、スキーや野球の試合で健常者と対等に競技できる者もいる。そこで、本研究では運動面、特に競技スポーツと関連する体育学科の学生と、そうでない学科の学生を対象として、障害学生に対する情緒的意味の意味構造に及ぼす当該専攻学科の影響を考察する。

方 法

調査対象者及び調査時期

本研究では、体育系と非体育系の学科の影響を検討するため、体育系学部のみからなるK大学の学生122名(男子108名、女子14名)と、総合大学であるT大学のなかの教育・社会科学系の学生137名(男子36名、女子101名)の計259名にイメージ連想テストを実施した。しかし、K大学の女子は14名と、下位群を構成するだけの人数が集まらなかったため、本分析からは省き、残りの245名を分析対象とした。テストは、1995年11月にK大学は心理学の授業の時間に、またT大学は点字の授業の最初の時間に実施した。対象者の平均年齢は19.84歳であった。なお、調査対象者に障害を持つ者はいなかった。

手続き

以下の手順で記述語の選択を行った。

1. 標的概念の設定 標的概念は、障害種別、対人魅力、個人的能力の分野に含まれる刺激対象から選んだ。障害種別の分野からは、一般の競技スポーツへの参加が極めて困難な「視覚障害学生(目が全く見えず、字の読み書きには点字を、歩く時は白杖を使う学生)」と、競技スポーツによっては参加が可能な「聴覚障害学生(耳が聴こえず、話す時は手話を使う学生)」を選んだ。一方、対人魅力の分野では、対人関係を持ちたいと思う「好みの男子学生」と「好みの女子学生」を、また個人的能力の分野では大学生活において最も重要な問題の1つである学業に関し「学力優秀な学生」を選んだ。これに、統制概念として当人の自己像を表す「自分自身」を加え、計6タイプの標的概念を設定した。

2. 記述語の収集 上記6タイプの大学生の印象を表すのに適切な記述語を収集するため、各標的概念を個別に提示し、それぞれの概念から想起される記述語をできるだけ多くあげさせるイメージ連想テストを実施した。その結果、K大学とT大学を合わせ、6つの標的概念に対し得られた記述語は、全部で2686であった。これらの記述語の内容を筆者と4人の研究協力者がKJ法を用いて個別に分類し、筆者がそれらを相互に比較検討し、8つのカテゴリー(困難、意志力、性格、賞賛、

知力、外見、関係、その他)に分類した。なお、意志力は以下「意力」とした。これら8つのカテゴリーと標的概念に対する記述語の関係に基づいて、記述語の意味内容が同一のもの、あるいは類似したものを1つにまとめた結果、131となった。この131の記述語のうち、出現頻数6以上の記述語は、以下の80であった。なお、カッコ内は出現頻数である。

困難：大変な(76)、かわいそうな(68)、苦しい(51)、不便な(28)、危ない(17)、不安な(13)、難しい(13)、悲しい(11)

意力：努力家の(164)、強い(124)、無気力な(41)、弱い(41)、信念のある(33)、意志が強い(27)、我慢強い(19)、未熟な(17)、冷静な(14)、自立心のある(13)、不安定な(11)

性格：やさしい(129)、明るい(97)、楽しい(87)、真面目な(62)、活発な(52)、穏やかな(39)、積極的な(37)、暗い(22)、不真面目な(21)、堅い(17)、爽やかな(16)、思いやりのある(15)、消極的な(15)、厳しい(14)、冷たい(14)、暖かい(13)、寂しい(12)、おおらかな(9)、つまらない(9)、わがままな(9)、素直な(8)、のんびりした(8)、甘い(8)、広い(8)、落ち着きのない(7)、要領の良い(6)、気がきく(6)、柔らかい(6)

賞賛：素晴らしい(159)、頼もしい(56)、偉い(52)、うらやましい(42)、良い(20)、頼りない(17)、尊敬できる(17)、悔しい(11)、豊かな(9)

知力：賢い(85)、敏感な(41)、知的な(24)、勉強好きな(24)、鈍い(12)

外見：美しい(103)、かわいい(76)、格好良い(63)、たくましい(30)、男らしい(11)、大きい(10)、細い(8)、質素な(8)、清潔な(7)、スポーツマンの(7)、女らしい(7)、小さい(7)

関係：遠い(47)、話しやすい(35)、快い(6)

その他：普通の(36)、分からない(11)、忙しい(8)、遊び好きな(6)

結果と考察

6タイプの大学生に対し想起された情緒的意味の意味構造を解明するに当たり、方法の手続き2に示された80の記述語のうち、標的概念のいずれかで出現頻数10以上を示した43の記述語を、各概念の代表項目とし(TABLE 1)、各出現頻数を6つの標的概念別にT大学の男女別とK大学の男子の3群に分けた。従って、本研究では[標的概念6×学生群3]×[記述語43]のクロス集計表に数量化理論Ⅲ類の双対尺度法を適用した。得られた各成分の寄与率は、27.97%、20.69%、

TABLE 1 数量化理論Ⅲ類(双対尺度法)による記述語の重み係数

カテゴリー	番号	記述語	成分Ⅰ	成分Ⅱ	成分Ⅲ	成分Ⅳ
困 難	1	大変な	1.187	0.393	-1.391	0.137
	2	かわいそうな	1.607	0.509	-1.751	0.317
	3	苦しい	1.211	0.242	-1.313	0.226
	4	不便な	1.151	0.282	-1.330	0.136
	5	危ない	1.370	0.524	-1.508	0.256
意 力	6	努力家の	0.810	0.283	-0.109	0.126
	7	強い	0.388	0.300	-0.605	-0.973
	8	意志が強い	0.592	0.423	-1.036	-0.328
	9	我慢強い	1.162	0.194	-1.044	0.202
	10	弱い	0.520	-1.897	-0.472	0.592
	11	未熟な	-0.014	-3.468	-0.000	0.344
	12	無気力な	-0.082	-4.447	0.179	0.847
	13	信念のある	-1.158	0.427	0.145	-1.341
性 格	14	暗い	1.218	0.167	-0.325	0.519
	15	穏やかな	0.016	-0.039	-0.478	0.341
	16	やさしい	-1.169	0.362	-0.300	-0.524
	17	明るい	-0.875	-0.271	-0.227	-0.718
	18	楽しい	-1.001	-0.218	0.131	1.455
	19	活発な	-0.710	-0.548	0.052	-0.865
	20	不真面目な	-0.157	-4.195	0.180	0.546
	21	積極的な	-0.134	-0.924	0.240	0.200
	22	真面目な	0.190	-0.092	1.355	0.169
	23	冷たい	0.312	0.236	2.249	0.313
賞 賛	24	尊敬できる	0.235	0.602	1.852	-0.375
	25	悔しい	0.845	0.196	3.596	1.746
	26	うらやましい	0.802	0.750	3.535	1.188
	27	素晴らしい	0.764	0.311	1.208	0.593
	28	偉い	1.068	0.491	0.194	0.404
	29	頼りない	0.288	-3.305	-0.265	0.683
	30	頼もしい	-0.341	0.299	0.184	-1.787
	31	良い	-1.306	-0.156	0.162	0.607
知 力	32	敏感な	0.912	0.087	-0.639	0.086
	33	知的な	-0.723	0.401	0.805	-1.460
	34	賢い	0.058	0.425	1.142	-0.386
	35	勉強好きな	0.238	0.684	2.355	0.583
外 見	36	かわいい	-2.143	0.819	-0.711	2.226
	37	美しい	-1.817	0.769	-0.696	2.192
	38	格好良い	-1.055	0.159	0.396	-1.420
	39	たくましい	0.385	0.235	-0.751	-1.361
	40	男らしい	-0.907	-0.175	0.320	-3.432
関 係	41	遠い	1.143	0.561	0.049	0.424
	42	話しやすい	-1.284	0.088	-0.206	-0.479
その他	43	普通の	0.025	-1.824	-0.171	0.703

17.52%, 11.39%, 6.27%で、全ての値が0.1%水準で有意であったが、第Ⅴ成分以降の寄与率が10%を切っていたため、本研究では第Ⅳ成分までを採用した。また、標的概念と記述語の間のクラメールの関連係数は、0.341であった。

1. 記述語の意味構造

TABLE 1 には4成分に対する記述語の重み係数を示した。このうち絶対値が1.0以上の記述語に基づいて、各成分を以下のように解釈した。

(1)成分Ⅰ プラス1以上の値を示しているのは、か

わいそうな、危ない、暗い、苦しい、大変な、我慢強い、不便な、遠い、偉いで、上位項目のほとんどが、手続きの2で分類された「困難」のカテゴリーに属していた。プラスの側は特に、気の毒で痛ましい状態を示す記述語が多く、「痛ましき」を表していると解釈した。一方、マイナスの側では、かわいいが-2点を越え、-1点台では美しい、良い、話しやすい、やさしい、信念のある、格好良い、楽しいというような「好ましい」特徴を示していた。従って、成分Ⅰを「痛ましき・好ましき」因子と命名した。

(2)成分Ⅱ プラスで大きい値を示す記述語はなかった。これに対し、マイナスの側では、無気力な、不真面目なが-4点台、未熟、頼りないが-3点台を越え、非常に大きい値となっていた。さらに、弱いと普通が-1点台であった。このような特徴は、現代の日本の大学生が示すスチューデント・アパシーの状態に類似したものである(下山, 1996, 1997)。従って、この成分を「スチューデント・アパシー」因子とした。

(3)成分Ⅲ ここでは悔しい、うらやましいが3点台、勉強好きな、冷たいが2点台、尊敬できる、真面目な、素晴らしい、賢いが1点台で、妬み的な内容が際立つものの、「賞賛」のカテゴリーに属する記述語がそれに続く特徴を示しており、プラスの側は「妬み賞賛」を示すと解釈した。一方、マイナスの側をみると、かわいそうな、危ない、大変な、不便な、苦しい、我慢強い、意志が強いが-1点台で、困難な状態とそれに耐える精神力を示す内容となっていた。そこで、この成分を「妬み賞賛・忍耐力」因子とした。

(4)成分Ⅳ プラスで大きい値は、かわいい、美しいが2点台、悔しい、うらやましいが1点台で、前2者は、「魅力的な女性」の一般的な属性を示すだけでなく(奥田, 1997)、女性リーダーの特徴としてもみられるものである(豊田・生田, 1998)。これに対し、マイナスでは男らしいが-3点台、頼もしい、知的な、楽しい、格好良い、たくましい、信念のあるが-1点台であり、「男らしい」からも明らかのように、男性の好ましい属性を示すものと言える。つまり、好ましきの基準が男女で逆転しているわけで、好ましい男女の属性を判別するものと言える。従って、この成分を「性別属性」因子とした。

2. 3群の標的概念と各成分との関連性

TABLE 2 には学生3群毎に各標的概念の重み係数を示した。TABLE 1 及び2における成分Ⅰを横軸に、成分Ⅲを縦軸に、重み係数に基づいて3群の標的概念及びそれらと関連する記述語をプロットしたのが、

TABLE 2 数量化理論Ⅲ類(双対尺度法)による標的概念の重み係数

標的概念	成分Ⅰ	成分Ⅱ	成分Ⅲ	成分Ⅳ
B 1	0.788	0.247	-0.689	0.000
B 2	1.031	0.379	-0.919	0.349
B 3	1.275	0.424	-1.097	0.091
D 1	0.535	0.207	-0.647	-0.156
D 2	0.973	0.248	-0.942	0.228
D 3	1.302	0.334	-1.097	0.212
M 1	-0.738	0.103	0.165	-1.715
M 2	-0.641	0.177	0.084	-2.145
M 3	-0.795	0.097	0.382	-1.755
F 1	-1.210	0.318	-0.081	-0.340
F 2	-1.661	0.402	-0.514	1.172
F 3	-1.930	0.721	-0.611	2.061
C 1	0.535	0.465	1.618	0.099
C 2	0.608	0.547	2.430	0.920
C 3	0.756	0.491	2.360	0.909
S 1	0.014	-3.006	0.005	0.473
S 2	-0.138	-3.619	0.270	0.806
S 3	-0.114	-2.396	0.153	0.184

注1：Bは視覚障害学生，Dは聴覚障害学生，Mは好みの男子学生，Fは好みの女子学生，Cは学力優秀な学生，Sは自分自身。

注2：アルファベットの後の数字は，1はT大学の女子，2はT大学の男子，3はK大学の男子。

FIGURE 1である。また，成分Ⅱを横軸に，成分Ⅳを縦軸に，重み係数に基づいて3群の標的概念及びそれらと関連する記述語をプロットしたのが，FIGURE 2である。

(1)成分Ⅰと成分Ⅲの組み合わせ FIGURE 1をみる

と分かるように，「痛ましき」の軸と，「忍耐力」の軸に囲まれた第4象限の意味空間には，障害学生を表すB1，D1，B2，D2，B3，D3の標的概念が位置していた。すなわち，障害学生を表す全ての標的概念がここには含まれており，障害学生に対する意味構造は，障害種別を越えた3群共通のものであることが示された。これは，従来の研究結果とも一致している(島田等，1974)。しかし，男子群に属するB3，D3，B2，D2は両因子の重み係数の絶対値が1.0前後と大きいものに対し，女子群に属するB1とD1の値は男子群よりも小さく，特に，K大学の男子と，T大学の女子の差が大きかった。これは，3群の意味構造が全体的には同一傾向を示すものの，構成要素(記述語)のレベルではウェイトの置き方に違いのあることを意味している。例えば，「大変な①」や「苦しい③」は，D3，B3に近く，「意志が強い⑧」や「敏感な⑫」はD1，B1に近くなっていた。すなわち，女子の方が男子よりも障害学生を困難な状態にいるとみなす傾向の弱いことが示唆された。この結果は，女子学生の方が障害学生からの負担感を感じる程度が低いことを意味しており，女子学生の方が男子学生よりも，障害学生との表面的な交流に抵抗感がないという河内らの結果(河内，1999；河内・四日市，1998)を支持するものと解釈される。

この「痛ましき」の軸とは正反対の方向を示す「好ましき」の軸で大きな値を示すのが，好みの男女学生

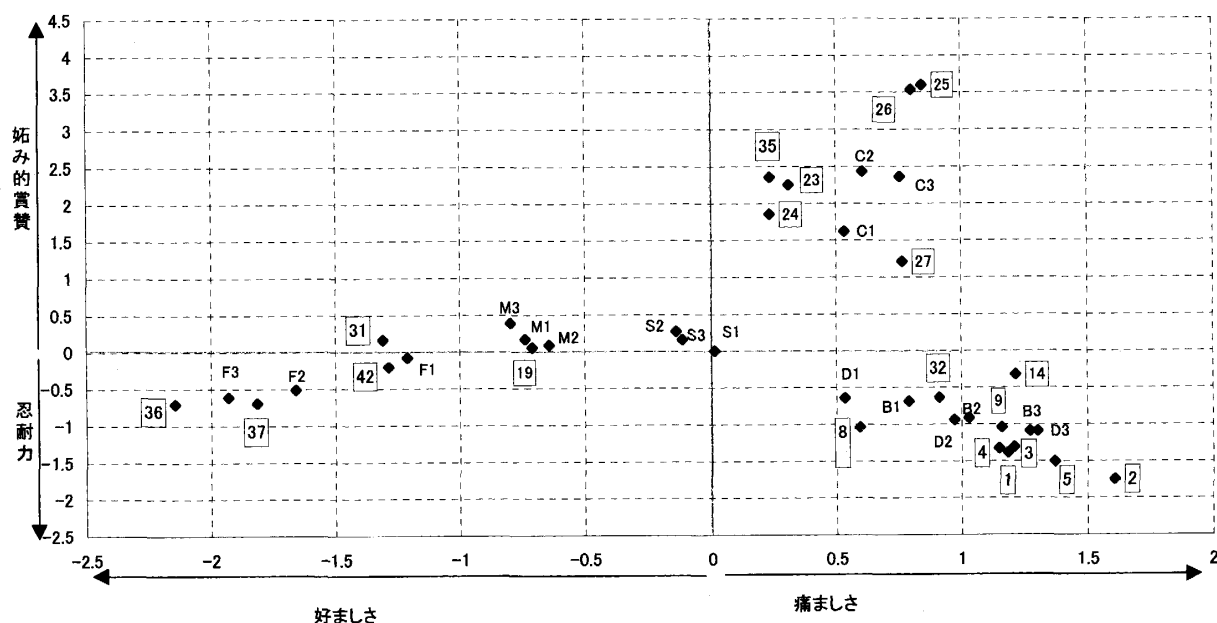


FIGURE 1 成分Ⅰ及び成分Ⅲの重み係数に基づく標的概念及び代表的記述語の散布図

注1 アルファベットの後の添付数字はTABLE 2の標的概念を示す。

注2 □付き数字はTABLE 1の記述語の項目番号を示す。

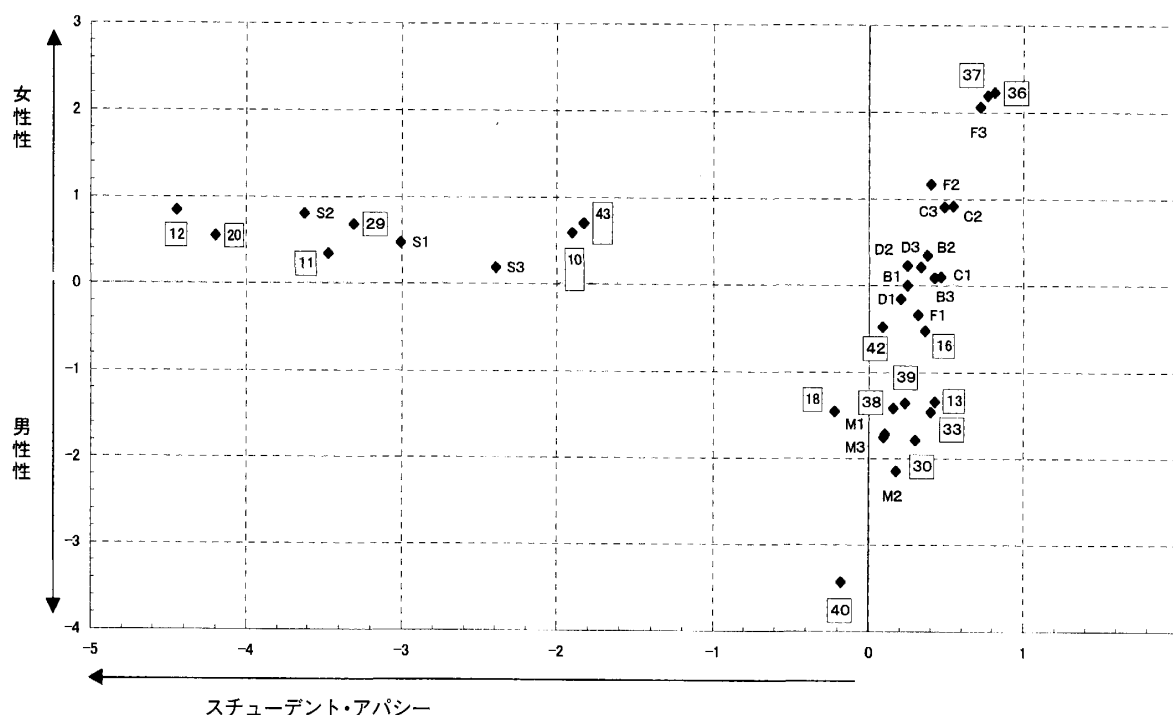


FIGURE 2 成分Ⅱ及び成分Ⅳの重み係数に基づく標的概念及び代表的記述語の散布図

注1 アルファベットの後の添付数字は TABLE 2 の標的概念を示す。

注2 □付き数字は TABLE 1 の記述語の項目番号を示す。

を表す標的概念であった。特に、障害学生の標的概念と最もかけ離れている記述語は、「好みの男子学生」と関連する「活発な⑩」などの身体的活動性ではなく、「好みの女子学生」を特徴づける「かわいい③⑥」や「美しい③⑦」のような身体的魅力であることが明らかとなった。この傾向は、「痛ましき」の軸と同様、K大学の男子に強く、T大学の女子が一番弱く、これが男女差なのか、専攻学科の違いなのかを今後検討することが必要であろう。いずれにしても、この因子から、「障害学生」と、「好みの学生」の標的概念とは、意味構造上相反するものであることが示された。つまり、このことは障害学生は好まれる対象ではなく、むしろ抵抗を感じる存在であり、従って健常学生からは否定的行動をとられる可能性のあることが示唆された。同様に、障害者と健常者に対する意味構造が相反する関係にあることは、雇用主と従業員を対象とした調査でもみいだされており（島田等, 1974）、障害者が健常者からは受け入れられにくい存在であることが推察される。

一方、「忍耐力」の軸と正反対の「妬み賞賛」の軸で大きな値を示すのは、「学力優秀な学生」を表すC1, C2, C3であり、「うらやましい②⑥」、「悔しい②⑤」、「勉強好きな②⑤」などは障害学生には最も縁の無い意味内容であることが示された。この傾向は男子群で強く、

ここでも男女差が示唆された。これらの標的概念とは関係の薄い原点に近い所に集まっているのが、「自分自身」を表すS1, S2, S3であった。

(2)成分Ⅱと成分Ⅳの組み合わせ このS1, S2, S3は、FIGURE 2 から分かるように、他の標的概念とは関係の薄い「スチューデント・アパシー」の軸に大きな値を示していた。つまり、本調査に参加した大学生にもこの傾向ははっきり現れており、わが国の大学生の一般的特徴になりつつあることが推測される。しかも、女性性を表す第2象限に女子群だけでなく、両男子群も位置したのは注目に値する。特に、女性性の強い群の方がこの傾向が強くなっていた。これは、男子学生の方がスチューデント・アパシー傾向が強いという指摘（下山, 1995, 1997）とは異なる結果を示すものである。このような結果は、近年の高学歴を志向する女子学生にもアパシー傾向を示す者がみられるとする笠原（1988）の指摘と一致するものと言える。また、本研究の結果は、アパシー傾向を示す者には男性性が欠如し、成熟を拒否する心性があるという土川（1990）の指摘とも一致している。しかし、内容を詳細にみると、無気力傾向が顕著だったのは、T大学の男子であり、K大学の男子はその傾向が最も弱くなっていた。これは、「スチューデント・アパシー」傾向が、専攻学科と

も関連していることを示唆するものであり、今後この点の検討が必要であろう。

一方、女性性を表す第1象限に含まれる標的概念のうち、特に大きな値を示しているのが、F2とF3で、両男子群における「好みの女子学生」であった。このうちでも、F3に極めて近い記述語は、「かわいい③⑥」と「美しい③⑦」であり、男子学生が女子学生に望む属性は美的特徴であることから、男子学生は女性の外見に影響されやすいことが明らかとなった。このような傾向は、身体的魅力の諸研究からもみいだされており(奥田, 1997)、女性に対する男性の好みの一般的傾向とも言える。一方、T大学女子の「好みの女子学生」を表すF1は、男性性を表す第4象限に位置しており、「やさしい⑩」との関連が強く、男子群との違いが明確となった。

これに対し、「好みの男子学生」を表すM1, M2, M3は、男性性を示す第4象限に大きな値を示し、3群とも同一傾向にあることが示された。つまり、「好みの男子学生」の場合は、異性・同性を問わずかなり共通したイメージの定着していることが推測される。

3. 障害のある大学生に対し想起された記述語の意味内容について

ここでは、これまで考察してきた6つの標的概念のうち、障害のある大学生に対し想起された記述語の意味内容を個別に考察するため、視覚障害学生及び聴覚障害学生のいずれかで3群の出現頻数の合計が10以上となった21の記述語を採用し、各標的概念ごとに3群の出現頻数を百分率(以下頻度という)で示したのがTABLE 3である。この表には頻度の高いものが少ないため、一応の目安として10%以上のものを中心に、5%までの記述語について考察を加えた。ただし、T大学の男子の場合は標本数が小さいため、参考程度に止めた。

(1)視覚障害学生 3群共通して頻度が10%以上なのは、「努力家の⑥」、「強い⑦」、「素晴らしい⑦」であった。このような賞賛的評価は、これまでの障害者に対する態度研究ではほとんどみいだすことができないものである。このような結果が得られたのは、大学に進学した視覚障害者は、視覚障害者の中でも障害を乗り越えた特別な存在であるという見方があるためと推察される。このことは、頻度は低いが、「偉い②⑧」という記述語が共通してみられていることから支持されているように思われる。しかし「妬みの賞賛・忍耐力」因子では、賞賛と対立する「忍耐力」の側に障害学生と関連する全ての標的概念が位置していた。このよう

TABLE 3 3群における障害学生の標的概念を代表する21の記述語の出現頻数の百分率

番号	記述語	出現頻数の百分率					
		視覚障害			聴覚障害		
		TF	TM	KM	TF	TM	KM
6	努力家の	32	22	15	24	14	15
7	強い	26	11	14	16	6	9
27	素晴らしい	17	17	13	8	11	7
28	偉い	12	6	7	2	6	6
1	大変な	22	25	9	18	22	7
3	苦しい	15	14	6	8	14	8
5	危ない	7	11	5	0	0	1
2	かわいそうな	3	14	27	2	6	24
8	意志が強い	12	3	3	3	3	1
15	穏やかな	11	3	0	6	6	0
34	賢い	10	0	0	4	0	2
9	我慢強い	8	0	3	3	0	3
16	やさしい	9	0	2	6	3	0
41	遠い	10	17	1	1	8	9
32	敏感な	16	6	2	6	0	5
4	不便な	11	6	2	5	8	4
10	弱い	10	8	2	2	3	1
39	たくましい	6	8	4	1	0	3
14	暗い	2	6	7	1	3	2
17	明るい	3	3	1	6	11	0
43	普通の	0	0	0	3	3	6

注：TはT大学，KはK大学，Fは女子，Mは男子を示す。

な相違は、数量化理論Ⅲ類では標的概念と記述語との関連を全変数を用いて表しているのに対し、頻度では1つの標的概念と1つの記述語との関連を個別にみているためと考えられる。つまり、前者の分析では、障害学生とは相反する意味構造を持つ「学力優秀な学生」という標的概念が含まれているため、これと関連の強い賞賛的な内容の記述語が障害学生の標的概念とは対立する位置に来たものと推測される。しかし、「視覚障害学生」に対する賞賛の評価も実際には存在するのであり、両方の視点からの検討が重要であろう。

次に共通して頻度が高いのは、「大変な①」と「苦しい③」という記述語であったが、これらはこれまで多くの研究でみいだされたものと一致しており(例えば、Cornelius & Eggert, 1979; 河内, 1993)、障害者にはかなり一般的な特徴と言える。また、「危ない⑤」なども共通してみられていたが、これは、視覚障害者の場合、移動、特に外出時の歩行などでは安全性の確保が問題になることを考えると(総理府, 1985)、当然の結果とも言える。

他方、障害者に対する態度の中で最も一般的な感情とされている「かわいそうな②」(Monbeck, 1973; 河内, 1993)については、男子群の頻度だけが高く、T大学の女子はかなり低く、男女差が示唆された。同様に、「暗い⑭」も男子群の頻度の方が高かった。これに対し、

女子群の頻度の方が高いものとしては、「意志が強い⑧」、「穏やかな⑮」、「賢い③④」、「我慢強い⑨」、「やさしい⑯」があった。これらは全て肯定的なものであり、部分的には女子の方が障害者に対し肯定的であることが推測される。

一方、専攻学科の差が示唆されるものとしては、「強い④」、「敏感な⑫」、「不便な④」、「弱い⑩」、「たくましい③⑨」があったが、いずれもT大学、すなわち非体育系の学生の方が頻度が高くなっていった。これらの記述語の中には否定的なものもあり、非体育系である教育学専攻の学生であっても、部分的には否定的なイメージを持っていることが推測される。

また、これらの記述語の中に、「強い⑦」とは逆の「弱い⑩」が含まれており、相反する記述語の共存することが示された。この結果は、障害者に対する態度やイメージには両面感情的傾向があるという指摘とも一致しており (Katz et al., 1988), SD 法のような形容詞対では、障害者に対するイメージを的確に把握することは難しいとも考えられる。従って、森 (1983) が指摘するような単極の形容詞リストを用いることも今後考慮すべきであろう。

(2)聴覚障害学生 ここでは、「視覚障害学生」に比べ、全体的に頻度はやや低く、目安となる記述語も少ないが、3群共通なのは「努力家の⑥」、「強い⑦」、「素晴らしい⑯」、「大変な①」、「苦しい③」であった。また、「かわいそうな②」はT大学の女子の頻度が低いのにに対し、「不便な④」はT大学の男女の頻度が、「やさしい⑯」はT大学の女子の頻度が高いなど全体的には視覚障害学生の場合と類似した傾向を示していた。従って、障害のある大学生に対しては、障害種別が異なっても全体的には共通したイメージのあることが推測される。

しかし性格面をみると、「暗い⑭」とは逆の「明るい⑰」というイメージが示されており、部分的には障害種別によって違いのあることが示された。また、視覚障害学生と同様に、遠い存在であるとされてはいたが、K大学男子では視覚障害学生ではみられない「普通の⑬」という記述語もあり、視覚障害学生とは一線を画していた。これは聴覚障害者の場合、補聴器などを使っていなければ、外見的には、健常者と変わらないためと推測される。

以上これまでの結果を総括してみると、以下のようなことを結論づけることができるであろう。

(1)障害学生に対し想起される情緒的意味に関しては、障害種別、性別、専攻学科別の意味構造は、類似度が

高いものの、構成要素 (記述語) のレベルでは違いもみられた。

(2)障害学生に対する記述語のグループ別想起率をみると、視覚障害、聴覚障害いずれの場合も、対立関係にある賞賛的内容の記述語と痛ましさを表す記述語とが2大特徴を示していた。

(3)標的概念である障害学生と、好みの男女学生及び学力優秀な学生とは、意味構造上対立関係にあったが、その程度には性別、専攻学科別で違いのあることが推測された。

(4)「自分自身」の標的概念は、意味構造上「スチューデント・アパシー」因子と密接な関係にあり、女性性及び専攻学科との関連性が推測されたが、障害学生の標的概念との関係は示されなかった。

(5)意味構造上障害学生の標的概念と最も離れた位置にある「好みの女子学生」の標的概念は、構成要素 (記述語) のレベルで異性と同性とに違いがみられた。

引用文献

- 鮑戸 弘 1970 イメージの心理学 潮出版社
- Altman, B.M. 1981 Studies of attitudes toward the handicapped: The need for a new direction. *Social Problems*, 28, 321-327.
- Antonak, R.F., & Livneh, H. 1988 *The measurement of attitudes toward people with disabilities: Methods, psychometrics and scales*. Springfield, IL: Charles C. Thomas.
- Auvenshine, C.D. 1962 The development of a scale for measuring attitudes toward severely disabled college students. *Dissertation Abstracts International*, 23, 2416.
- Cloerkes, G. 1979 *Einstellung und Verhalten gegenüber Körperbehinderten: Eine Bestandsaufnahme der Ergebnisse internationaler Forschung*. Berlin: Marhold.
- Cornelius, D., & Eggert, V.D. 1979 *Sense ability*. Washington, D.C.: George Washington University.
- 学生ボランティア活動についての調査プロジェクトチーム (編) 1997 キャンパスにおけるボランティア活動ニーズ調査報告書 東京ボランティアセンター
- Gannon, P.M., & MacLean, D. 1995 Australian university students' attitudes towards disability: The first step to integrating students with a

- disability at university. *Australian Disability Review*, 1, 63—71.
- Horne, M.D. 1985 *Attitudes toward handicapped students: Professional, peer and parent reactions*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum.
- 岩下豊彦 1983 SD法によるイメージの測定 川島書店
- 笠原 嘉 1988 退却神経症—無気力・無関心・無快楽の克服— 講談社
- Katz, I., Hass, R.G., & Bailey, J. 1988 Attitudinal ambivalence and behavior toward people with disabilities. In H.E.Yuker (Ed.), *Attitudes toward persons with disabilities*. New York : Springer Publishing. Pp.47—57.
- 河内清彦 1990a 学生および教師の視覚障害者観 文化書房博文社
- 河内清彦 1990b 肢体不自由者(児)に対する大学生の態度構造とその形成要因としての専攻学科および性別の役割について 特殊教育学研究, 28 (3), 25—35.
- 河内清彦 1993 視覚に障害のある児童に対する小学校高学年児童のイメージ 特殊教育学研究, 31 (3), 17—26.
- 河内清彦 1994 視覚に障害のある人々を取り巻く現代の社会・心理的環境 谷村裕教授退官記念論文集刊行会(編) 視覚障害に学ぶ 谷村裕教授退官記念論文集, Pp.65—73.
- 河内清彦 1999 視覚障害学生を交流対象とした「キャンパス内交流自己効力尺度(CISES)」の作成 教育心理学研究, 47, 471—479.
- 河内清彦・四日市章 1998 感覚障害学生とのキャンパス内交流に対する健常学生の自己効力に関する研究 教育心理学研究, 46, 106—114.
- Monbeck, M.E. 1973 *The meaning of blindness : Attitudes toward blindness and blind people*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- 森 知子 1983 質問紙法による人格の2面性測定の試み 心理学研究, 54, 182—188.
- 奥田秀宇 1997 セレクション社会心理学 17 人をひきつける心—対人魅力の社会心理学— サイエンス社
- Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P.H. 1957 *The measurement of meaning*. Urbana, IL : University of Illinois Press.
- 島田睦雄・高木美子・秋庭信夫・熊谷信順・清宮栄一 1974 心身障害者の職業に対する雇用主等の態度 (2)—Semantic Differential 法の結果— 職業研究所紀要, 6, 39—51.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145—155.
- 下山晴彦 1996 スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究, 44, 350—363.
- 下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際—スチューデント・アパシー研究を例として— 東京大学出版会
- 総理府障害者対策推進本部担当室(編) 1985 障害者の外出・移動における意識調査報告書 大蔵省印刷局
- 障害学生問題研究会(編) 1990 総合大学における障害学生のあり方の基礎研究 多賀出版
- 障害学生の高等教育国際会議実行委員会(編) 1997 障害学生の高等教育—障害別・問題別の視点から— 多賀出版
- 谷合 侑 1995 進めよう視覚障害者の大学進学と職域拡大—そのQ & Aと資料集— 視覚障害者支援総合センター
- 豊田弘司・生田明子 1998 学生における男性及び女性リーダーの特徴 奈良教育大学教育研究所紀要, 34, 129—135.
- 土川隆史(編) 1990 スチューデント・アパシー 同朋舎
- わかこま自立生活情報室(編) 1998 大学案内 98 年度障害者版 身体障害者団体定期刊行物協会
- Yuker, H.E. 1965 Attitudes as determinants of behavior. *Journal of Rehabilitation*, 31 (6), 15—16.
- Yuker, H.E., & Block, J.R. 1986 *Research with the Attitudes Towards Disabled Persons Scales (ATDP) : 1960—1985*. Hempstead, N.Y.: Hofstra University.

付 記

本論文を作成するに当たり、原稿を校閲して下さった筑波大学講師の柿澤敏文博士に深謝致します。
(2000.4.12 受稿, 11.18 受理)

College Students' Meaning Structure of Images of Blind Students and Deaf Students : Gender and Major Field

KIYOHICO KAWAUCHI (INSTITUTE OF DISABILITY SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2001, 49, 81-90

The present study investigated the meaning structure of images (MSI) that college students have of blind students and deaf students. When 108 physical education majors and 137 education majors were asked to write descriptive qualifiers for each of the following concepts : "Blind Students," "Deaf Students," "Favorite Male Students," "Favorite Female Students," "Students with High Grades," and "Myself," this free association method resulted in 2686 qualifiers. My colleagues and I selected 43 of these on the basis of their frequency and their relevancy to the stimulus concepts. Analysis via the Quantification Theory III model indicated that the meaning structure of images about "Blind Students" were similar to that about "Deaf Students," whereas the meaning structure of images about "Students with Disabilities" were the opposite of those about "Favorite Students" and "Students with High Grades." Differences on the concepts of "Students with Disabilities" and "Favorite Female Students" were found between the male and female students, and between the education and physical education majors.

Key Words : meaning structure of images (MSI), major course, gender, image of blind students, image of deaf students, college students